

フタスジヒメハムシ天敵寄生蜂の発生実態

○大江高穂・横堀亜弥・加進丈二

宮城県古川農業試験場

宮城県のダイズ生産において、フタスジヒメハムシの加害による黒斑粒の発生は品質低下の一因となっており、主要害虫の一つとしてあげられる。本種の基礎的な生態に関する研究事例は少なく、発生予察や生物的防除の技術開発が進んでいないため、防除対策における化学農薬への依存度は高い。そこで、2014～2015 年にかけてダイズほ場における天敵寄生蜂の発生実態を調査し、フタスジヒメハムシの密度変動に及ぼす影響について検討した。

4 月から 10 月にかけて宮城県古川農業試験場内ダイズほ場から成虫を採集し、個体飼育することで寄生蜂による被寄生率の調査を行った。採集間隔は 2014 年は半月おきに、2015 年は一週間おきに実施した。採集方法について、ダイズ播種前の 4～5 月は 20×50cm の木枠を用いて、ほ場内 10 カ所の土を回収し浮遊法で土中の休眠成虫を採集した。ダイズ播種後の 6～10 月は、払い落とし法でダイズ上の成虫を採集した。

調査の結果、寄生蜂 *Centistes medythiae* Maeto et Nagai の寄生が確認された。この寄生蜂は土中から浮遊法で回収したフタスジヒメハムシ越冬世代成虫からは確認されないが、ダイズ上に現れた越冬世代成虫の被寄生率は発生直後から急激に高まることから、フタスジヒメハムシの成虫に対して寄生行動をとっていると推測された。

飼育期間中に死亡した個体の死亡要因に寄生が占める割合は 2014 年は 16%，2015 年は 33%であり、調査年により異なった。

2014 年は 6，7，8，10 月に採集した成虫に寄生が確認され、2015 年は 6～10 月に採集した成虫に寄生が確認された。寄生蜂はフタスジヒメハムシの全ての発生世代で寄生が確認されたが、被寄生率は越冬世代の発生盛期で 80～100%，第 1 世代の発生盛期において 20～40%，第 2 世代の発生盛期では数%であり、フタスジヒメハムシが世代を重ねる毎に被寄生率が低下していった。

The Studies on *Centistes medythiae*, a Parasitoid Wasp of Two Striped Leaf Beetle, *Medythia nigrobilineata* in Miyagi Prefecture

Takaho Oe・Aya Yokobori・Joji Kashin

Miyagi Prefectural Furukawa Agricultural Experiment Station